

ラーニング・アウトカムズの設定、周知で進める教育改善

創価大学

創価大学は育成をめざす人材像を実現するため、共通科目および各学部においてラーニング・アウトカムズの設定に取り組んでいる。これと並行して、科目ごとの到達目標の設定や到達度の評価などのしくみを整えることによって、根拠に基づく教育プログラムの改善を行っている。

到達度の測定が可能な具体的な目標を設定

創価大学は1990年代から、教育の質保証に向けたさまざまな取り組みを行ってきた。授業アンケートの導入、GPAの卒業要件化などに続き、2007年度から約2年をかけてカリキュラム改革を実施。同一名称同一シラバスとする科目の標準化や、履修人数の少ない科目の閉講措置などに取り組んだ。

創立50周年となる2020年度の創価大学像を「建学の精神に基づき『創造的人間』を育成する大学」と2010年度に定め、実現に向けた教育・研究システムの再構築を行っている。

2010年度からは、各学部が2009年度に策定したディプロマ・ポリシー(DP)をより具体化したラーニング・アウトカムズ(LOs)の設定に着手した。馬場善久学長は、その理由を「DPを達成するためには、各学年・各授業などのレベルで到達度を点検する指標が必要だと考えた」と語る。7学部を擁する総合大学にとって、全学一斉の設定は難しいと判断し、まずは経済学部が先行実施することになった。

あわせて、全学で共通科目のLOsの設定作業を開始した(図表1)。共通

科目には建学の精神に基づく「3つの目標」が設けられており、これを具体化してLOsを設定することになった。専門科目と共通科目の双方のLOsを考慮することによって、学士課程全体としての教育の質保証が可能になる、という考えだ。

各LOsに細目を設定しパイロット授業で検証

共通科目の3つの目標とは、「自立的学習者となる」「多文化共生力の育成」「真の教養を身に付ける」である。これらを「学生は何ができるようになるか」という簡潔な表現のLOsにブレークダウンするために、集中的な議論が行われた。教育改善を担う学士課程教育機構を中心に、学長室会議や学士課程教育機構運営委員会(機構長、教務部長、学部長などが出席)で検討が重ねられた。2011年1月に最終決定したLOsは、「知識基盤」としての1項目、「実践的能力」としての4項目、「教養ある市民としての資質」としての3項目の計8項目からなる。

さらに、これらをより具体的な項目にブレークダウンする細目づくりに着手。「実際にLOsを修得させることを

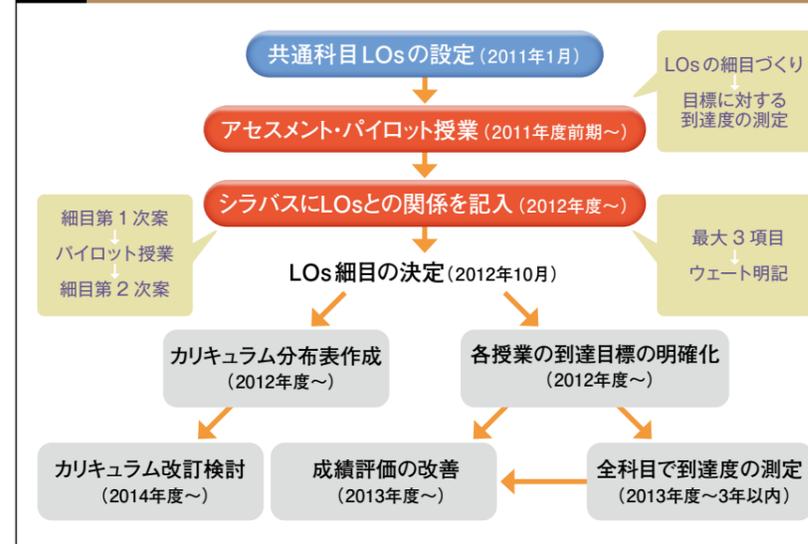
めざして授業を行うには、さらに表現を具体化する必要があった」と西浦昭雄学士課程教育機構副機構長。学生の能力がどのような状態になればLOsを達成したことになるのか、8項目のLOsそれぞれに3、4項目ずつの細目を第1次案として示した。

LOsと各科目の到達目標の関係、到達度の評価手法についてのアセスメントを目的に行われたのが、共通科目のパイロット授業の実施だ。対象授業は、該当するLOsと担当教員の所属学部が偏らないよう配慮し、2011年度に26科目、2012年度に23科目を設定。担当教員に報告書の提出を依頼した。

報告書には、該当するLOsの細目と科目ごとの到達目標がどのようにリンクしているか、到達目標の達成に向けて何に取り組んだのか、到達度をどのような評価手法で測り、どう判定したのか記載させた。この報告をふまえて、授業により適用しやすくするために細目を再検討し、2012年10月にはLOs細目が決定した(図表2に一部例示)。

担当した教員からは、「LOsを明確化することによって授業計画・実施・評価という流れに一貫性を持たせることができた」という声が聞かれる一方で、到達度の評価が難しいとの声が多

図表1 共通科目ラーニング・アウトカムズ(LOs)設定の流れ



図表2 共通科目のラーニング・アウトカムズ(LOs)と細目(一部抜粋)

| LOs | 細目 |
|-------------------------------|--|
| ◆知識基盤(学生が何を知っているべきか) | |
| 1 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する | 各科目に応じる |
| ◆実践的能力(学生が何ができるようになるべきか) | |
| 2 多面的かつ論理的に思考する | ・一つの事象を多面的に考察することができる ・問題・課題の本質を推察できる ・定量的または定性的な根拠にもとづき、論理的に思考できる |
| ⋮ | ⋮ |

く上がった。

LOsにはペーパーテストでは測れない内容も含まれるため、ループリックによる評価が、このパイロット授業で試行された。その結果、「履修人数の多い科目のレポート評価にループリックを導入することによって、学生に対する評価基準の透明性を確保でき、採点の効率性を高めることができた」などの報告が得られている。今後は、パイロット授業における評価手法の実例をまとめ、教員間で共有する予定だ。

報告書の提出を義務付け教員に自己改善を促す

2012年度からは、非常勤講師も含め、共通科目を担当する全教員に、担

当科目の到達目標と対応するLOs細目(最大3項目)を、シラバスに明記することを義務づけた。各科目がどのLOsに対応するかを集計することにより、個々の授業を改善するだけでなく、カリキュラム全体が8項目のLOsを達成できる構成になっているかを確認している。

集計の結果、LOs 8項目全てが年間100以上の授業によってカバーされていることが確認できたという。2013年度からは、各科目が特に対応を重視するLOs細目の明記を義務付けることによって、より正確に分布を確認し、2014年度以降のカリキュラム改訂に役立てる予定だ。

その他、シラバスに明記した到達目標について達成度を測定し、結果を自

己評価報告書にまとめ、3年以内に少なくとも一度は提出することが、全教員に義務づけられた。「シラバスにおける到達目標とLOsとの関係の明確化」(P)、「授業における取り組み」(D)、「到達度の測定」(C)、「シラバスの見直し」(A)というPDCAサイクルを、教員自身が回せるようにするための取り組みだ。

一方、学生が到達度を自己評価する取り組みも、2012年度から始まった。セメスターごとに行われている授業アンケートには、各科目で担当教員が設定したLOsについて、自身の到達度を5段階で書き込む。教員は集計されたデータを閲覧し、授業改善に役立てる。馬場学長は、「授業、あるいはカリキュラム全体でどんな力が身に付くのか、一番理解してもらいたいのは学生」と語る。自分がどこまで到達したのかを確かめながら進められるように、ポートフォリオと連動させていく予定だという。

経営学部以外も順次導入カリキュラム改訂に反映

LOsを先行導入している経済学部に加え、2012年3月に他の全ての学部においてもLOsが設定・公表された。現在、各学部の専門科目でも2014年度からのカリキュラム改訂にLOsを反映させる作業が行われている。「学部の教員の中には、共通科目の担当者としてすでに導入経験のある人もいる。その経験を学部を持ち帰り、他の教員をリードしてほしい」と馬場学長。

「教員なら誰しも、より多くの学生を成長させようと、教授能力の向上を望んでいるはず。LOsを中心とした質保証の取り組みは、そのための有効な手段の一つだ」と馬場学長は結んだ。